



## 石橋移設・復元の先駆的文化遺産 諫早眼鏡橋と模型橋 諫早の親子眼鏡橋



諫早眼鏡橋模型橋(手前)と諫早眼鏡橋(奥) 長崎県諫早市  
写真提供/中村まさあき

諫早眼鏡橋(長崎県諫早市、1839年架橋、橋長49・25<sup>1</sup>/<sub>2</sub>、幅橋5・5<sup>1</sup>/<sub>2</sub>)のある諫早公園に隣接する高城公園内に2012(平成24)年12月、長さ10<sup>1</sup>/<sub>2</sub>、幅1・1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>の諫早眼鏡橋模型橋が移築されている。この模型橋は、諫早眼鏡橋の正確な縮尺の模型橋で、高城公園から見ると位置によっては、手前に小さな模型橋、その先に諫早眼鏡橋が見え、この大小2橋を「親子眼鏡橋」と呼ぶ人がいる。現在は緑豊かで静かな公園内に落ち着いた様子の親子眼鏡橋だが、2橋がここに保存されるまでには、それぞれの変遷があった。

1957(昭和32)年の「諫早大水害」では、本明川に架かっていた諫早眼鏡橋に流木やがれきなどが詰まり、周辺に重大な浸水被害を及ぼしたとして、住民から橋の爆破・撤去の声が挙がった。これに対し、当時の野村儀平・諫早市長は、諫早眼鏡橋を石造橋で初めてとなる国の重要文化財指定とし、橋を一時石材に解体して、諫早公園へ移設・復元するという前例のない事業を推進した。

当時、同市役所土木課の職員としてこの事業の工事主任を務めた人物が、後に本会の初代事務局長

となる山口祐造氏(故人)だった。山口氏は諫早眼鏡橋の移設・復元に向け、諫早石工組合員の協力を得て、眼鏡橋に使われている約2800個に上る5分の1スケールの石材を造り、10カ月を掛けて何度も、模型橋を組み立てては解体する実験を行った。この当時の状況は、「石橋は生きている」(山口祐造著、葦書房、1992年発行)等に詳しく記されている。

模型橋は、諫早眼鏡橋の移設・復元が実現した後に地元保存が検討されたが、水害後の諫早市には適地がなかったため、74(昭和39)年に国の仲介により、埼玉県所沢市の旧ユネスコ村に譲渡、保存された。しかし、2006(平成18)年にユネスコ村が閉鎖され、模型橋は放置された状態になっていたため、これを憂慮した地元経済界や文化団体、行政や市民の有志らが協力して募金活動を行い、模型橋の里帰りが実現した。

諫早眼鏡橋の移設・復元ができたのは、この精巧な模型橋があったからであり、当時の移設・復元を物語る文化遺産として模型橋も貴重である。大小2つの眼鏡橋を親子眼鏡橋として、諫早の新たな名所としてもらいたいものである。

### 中面の案内

2面 熊本・平山橋を移築

6面 石橋を守るために(2)(軸丸英顕)

4面 滋賀・甲賀十三橋めぐり(森野秀三)

7面 I♡めがね橋(上塚尚孝)

# 肥後種山石工技術継承講座受講者も参加

## 平山橋を移築

熊本・山鹿市

熊本県山鹿市の平山温泉街にあった「平山橋」は、保存する方向で2012年に解体・撤去され、石材が山鹿市立博物館の敷地内に保管されていたが、同温泉街にある平山阿蘇神社そばへの移築が決まり、今年3月にその工事が終わった。工事には肥後種山石工技術継承講座の受講者も参加し、石橋移築工事の腕を磨いた。本会の石橋構築・修復技術者養成事業の実行委員長を務める上塚尚孝・事務局長のレポートを紹介する。

写真提供／中村まことあき

### 江戸期の石橋を移築へ

熊本県の北部に位置する山鹿市にある平山温泉。温泉街を流れる岩村川に架かっていた平山橋は、江戸末期の1861(文久元)年に築造され、1914(大正3)年には下流側に同様の石材、同サイズの石橋を併設して路面の拡幅がなされ、温泉利用客に重宝がられていた。

しかし近年、大雨になると付近の住宅が床下浸水の被害を受けるとして、地域住民から平山橋撤去の声が挙がり、2014(平成26)年に解体。同年末、温泉郷にある平山阿蘇神社(阿蘇五宮)そばの空き地に、江戸期築造部分のみ移築されることになった。

◆ ◆  
同年12月6日。移築工事が行われている現場に行くと、鉄骨製の支保工が設置され、直方体の輪石が左岸側に4列、右岸側に5列積まれていた。現場には、本会の石橋構築・修復技術者養成事業で実技指導をお願いしている竹部光春師匠、世話役を務める尾上二哉さん、受講者の藤原孝史さん、本田和幸さん、山下勇輔さんの顔があった。尾上さんに聞くと、支保工に積まれた輪石は、まだ仮積み状態であるらしい。

### 石材に丁寧な加工が

一見すると、輪石の加工は見事なもので、接合面は丁寧に加工が施されている。「相当な腕の持ち主が居らしたとだろう。誰だるか」と竹部師匠はおっしゃる。師匠は過去に、鹿兒島市の西田橋解体復元工事で石工棟梁を務めた経験をお持ちだから、野津石工、岩永三五郎の仕事ぶりを思われてか、驚きと感心の様子。同事業の世話役を務める尾上二哉さんが、「近くにある湯山橋については『石工猿渡某』と記録にあるけれど、この平山橋の石工は誰か、分かっていますか」と答えられる。

「すり合わせの面や切断面が、これだけ見事に仕上げているのは、石工に十分な報酬を出したスポンサーがいたのかもしれない」と、誰かが言った言葉を聞



保存工事が完成した平山橋(2015年3月22日撮影)



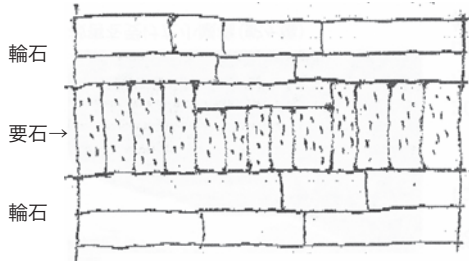
1861(文久元)年築造部分のみを保存



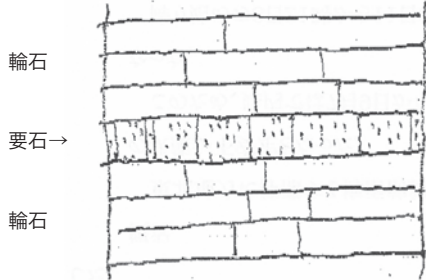
要石の列だけが下に下がっている

### アーチを下から見て分かる 要石の特徴

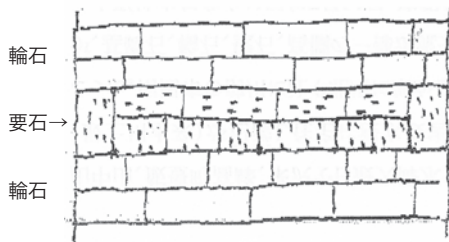
例1 熊本市北区の豊岡橋(1802年)



例2 熊本・御船町の門前川橋(1808年)



例3 熊本・宇城市の松合橋(1820年)



→川の流れの方向→

竹部師匠不在のため、尾上さんが、「まずEの石材を重しのため、中央に仮置きします」と指示。「その次は上流側A、下流側Hをはめまーす」の声で、まずクレーンでAの石材が所定の位置へ運ばれ、本田さんがそれをはめる前に石材についた土を拭き取る。その後、山下さんと藤原さん、尾上建

平山橋の輪石について、竹部師匠が「どっしても分からん」とおっしゃるのは、要石の列だけが、隣り合わせた輪石より5センチほど底面が下に下がっていること。なぜこんな設計、いや工法なのだろうつか…。

私の知る限りでは、城北の地(熊本県

同年12月19日。前日に尾上さんから、

北部)にあるめがね橋にこの要石の形態は多い。尾上さんもその理由をご存じない。それでも、平山橋の輪石を復元する際に設置された支保工も、要石の底面だけが5センチほど下に下がった状態を前提に製作され、元通りに石材を組み立てるようにになっている。これはわれわれに残された宿題である。

さて、工事の様子を見てみると、受講者はバールを手に、直方体の石材のすり合わせに真剣なまなざしで取り組んでいる。なかなかほかとらないものの、竹部師匠の指示を聞きながら微調整していく姿は、見ていて頼もしい。

この日は近くの湯山橋や小原橋を撮影するため、私は現場を後にした。

### 要石に謎の特徴

き、そういうことがあったのかもしれないと思えた。そういえば、鹿児島市にあった甲突川五石橋(玉江橋、新上橋、西田橋、高麗橋、武之橋)のうち、仕上げ鉋(かんな)をかけたような面に驚く西田橋は、他の4橋より工費が2・5〜4・5倍も高額。「鹿児島では報酬が高ければ、石工もそれなりの仕事をしとった」と竹部師匠は振り返られる。

「明日、要石を入れます」と聞いたため、要石を入れる現場に興味湧き、平山橋移築工事の現場を訪れた。

要石はアーチを横から見ると中央に位置するが、アーチを下から見てみると、いろいろな発見がある。

例1の要石は川の流れに対し、垂直方向に長い直方体の石材が多数使用されている。例2は要石が立方体になっていて、輪石1列には2〜3個の石材が使われている。先に築造された例1の石橋の要石が例2に変化したとして、どちらも他の輪石よりも要石には多数の石材が使われている。

### 両脇から順に中央へ

設の坂本さんが一緒になって、所定の位置にぴったり納めようと真剣に取り組む。ちょっと位置が悪いと、再度クレーンでつり上げては納め直す。その繰り返しで、石材AとHが両端に鎮座した。

次は石材Cの番。クレーンで同様につり上げて所定の場所に降ろし、そこから微調整しながら、といつても隣接する石材の面をそろえるために、バールや手を使う。お互いの気持ちと心、呼吸がそろってはじめて、うまく納まっていく。

城北地方の要石の底面は、すぐ横の輪石の底面より5センチほど下がっている。隣接する要石の底面の位置をそろえ、接合面もぴったり合わせる。作業は三次元の世界の中に浸った状態。そして全ての要石がようやく納まった。



平山橋(1861年)の要石の列

## 石橋を町おこしに生かす 「甲賀十三橋めぐり」

滋賀県を拠点に全国の石橋を紹介する活動を続ける森野秀三会員。活動の中で特に地元で注目を集めているのが、「甲賀(こうか)十三橋めぐり」。甲賀・湖南市の神社に架かる13の神橋巡りを、町おこしにつなげる試みである。独特の形をした参道橋の魅力とその活動の広がりについて、森野会員に語ってもらった。

写真提供/森野秀三

### 背の高い太鼓橋や重厚な石桁橋が点在



① 大鳥神社太鼓橋  
甲賀市甲賀町鳥居野、1744(延享元)年架橋



③ 矢川神社太鼓橋  
甲賀市甲南町森尻、1671(寛文11)年架橋



⑤ 八坂神社下馬橋  
甲賀市水口町巖峨、1699(元禄12)年架橋



④ 和野八幡神社太鼓橋  
甲賀市水口町和野、1703(元禄16)年架橋



② 椿神社太鼓橋  
甲賀市甲賀町隠岐、1751~64(宝暦)年架橋

その後、私は親の介護のため滋賀県甲賀市に帰りましたが、県立琵琶湖博物館(草津市)で、石橋写真展を4年連続で開催しています。滋賀県では驚くことに、新聞社が新聞紙面3分の2を使って、特集記事を掲載してくれました。おかげで昨年の琵琶湖博物館の「すばらしき石橋展」には、たくさんの来場者があり、さらに昨年、「文化で滋賀を元気に賞！」をいただくこととなりました。

地元テレビ局の夕方のニュースでも「すばらしき石橋展」が紹介され、その翌日から1カ月間、同局のスポット「マイチャル」として石橋展の様子は毎日、放送されました。

会員活動報告 森野 秀三(滋賀県)

滋賀県出身の私は以前、大阪に住んでいましたが、滋賀県大津市の滋賀会館ギャラリーで10年間、「日本の石橋展」という写真展を催していました。

同会館には滋賀県の各方面の業界界合が数多く入居していたことから、各業界や行政幹部の人たちが写真展を見に来られたことが幸いしました。県発行の雑誌「湖国と文化」の123号に「石橋紀行」という特集を組んでもらったことで、石橋のことが県民に知られるようになりました。また、滋賀県甲賀合同庁舎の県観光展では、後で紹介する「甲賀十三橋」という、私が発案した企画展を特別に開催してもらいました。



# 石橋を守るために(2)

会員 軸丸 英顕(熊本県)

写真提供/軸丸英顕

前回、石橋の存在を脅かす「社会の声」について述べました。なかでも「洪水の防止を望む声」に込めることは、安全な社会をつくる上で避けて通れない大事なことです。

洪水を防ぐ対策としては、川幅を広げるのが一般的ですが、石橋の保全に影響が少ない他の方法もあります。今回、遊水地やダムなどを整備して、川の水量を調整する「流出抑制」について紹介します。この方法を採用すれば、川の形をあまり変えなくても洪水を防ぐことができ、結果的に現位置での石橋保存が可能になる場合もあります。



写真1 坪井川遊水地の水門(熊本市北区)  
川の増水時に遊水地に水が入り、減水後に徐々に水が戻る構造

## 水を「ゆっくり流して」守る

### 遊水地による流出抑制の事例

熊本市の坪井川は、再三、大きな洪水を引き起こしてきたため、昭和50年代から河川改修が進められました。人家が密集する市街地を流れているので、川幅を広げるには膨大な費用と時間が必要になります。

そこで、市街地の上流に堤防を越える量の川の水を一時的にため、水が減った後でゆっくりと流す役割を持つ遊水地(写真1)を造って、最大流量を毎秒約80ト減らす(図1)改修が行われました。これによって、市街地では川底を掘り下げただけで、洪水を防げるようになりました。

川幅が変わらなかつたため、坪井川に架かる明治8年架橋の明八橋と10年架橋の明十橋(写真2)はそのままの姿で残ることができました。明十橋は今も現役の県道橋としての役目を果たし、明八橋は歩道橋としての現地に残り、月見会の会場になるなど、地域住民の絆

を深める場としても大きな役割を果たしています。

また、東京都心にある常磐橋(写真3)や日本橋も、実は遊水地と同じ流出抑制の役割を持つ、地下調整池などの施設によって守られているのです。



写真2 明十橋(熊本市中央区)  
扁平アーチで路面は平坦、幅も広く県道橋として現役。名工、橋本勘五郎の傑作



写真3 常磐橋(東京都千代田区)  
日本橋川に架る明治初期に築造された石橋。東日本大震災で被災し、現在は復旧工事中

### ダムによる流出抑制の事例

熊本県美里町にある霊台橋(写真4)のすぐ上流には、緑川ダムが整備(昭和46年完成)されています。このダムは、強い雨が降った時に一時的に水を貯留し、下流の流れが小さくなってから徐々に流す役割を持っています。国土交通省によると、緑川ダムは毎秒800トの水を調節できる能力があるとされます。ダムによる流出抑制によつて、霊台橋付近の川

幅は今後も広げる必要はなく、洪水防止の面から霊台橋の撤去が検討される心配はありません。上流側に新しい橋が併設され、国道橋としての役割を終えた霊台橋は建設時の形を取り戻

し、緑川の川面に美しい姿を映しています。

同様に、熊本県菊池市の迫間川でも、上流に造られた竜門ダムの流出抑制効果によって、川の拡幅は不要になりました。このため、迫間橋(1829年架橋)など、この川に架かる石橋群もそのまま残ることができています。

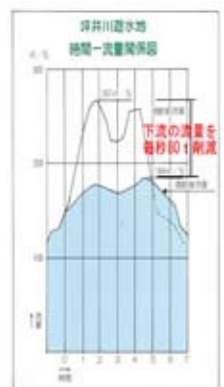


図1 坪井川の流出抑制計画(1991年熊本県河川課発行「坪井川多目的遊水地」より)



写真4 霊台橋(美里町)  
上流(右上)の緑川ダムで霊台橋は守られている

次回は、「河川バイパス」によって石橋が守られた事例を紹介したいと思います。この方法は、九州北部豪雨で被災した福岡県八女市の宮ヶ原橋付近の河川改修に採用される予定です。

# 伝承鶴呑み時代から 史実確認の時代へ

「皇居の二重橋は、勘五郎さんが架けなはったつでしよう」。あれつ、岩永三五郎さんは種山石工で思つとつたら、違つとですか」

東陽石匠館に来られるお客さんの多くは、伝承を鶴呑(つ)のみにしておられる。実は、私も昔はそうだった。そのいくつかを、昭和20年代末〜30年代ごろのスクラップブックから紹介しよう。

「眼鏡橋の石工 橋本勘五郎」と題して、郷土史家高田素次さん(昭和29年12月発行・熊本日日新聞)は、「眼鏡橋架設には特殊な技術を持っていたために、明治政府から召し出されて宮城二重橋の架設に当たつたと伝えられる」

「近世名匠伝」(昭和32年11月熊日)を連載した豊福一喜さんも「勘五郎が土木技術の腕を買われ…(省略)…宮城の二重橋はじめ…」と似た執筆ぶり。

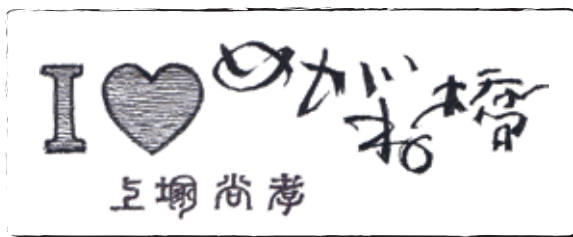
さらに前述の高田さんは、連載「熊本人物鉅脈」(昭和37年10月)にも同様の内容を執筆され、研究不足だった私は、「そのなかの」と鶴呑みにしていた。

その後、熊日社が「熊本大百科辞典」の発行を企画し、多数の関係者に執筆を依頼した。あろうことが私にも、「種山石工」についての執筆依頼が来た。断ればいいのには私は、史実確認の手段も知らぬ

ままに書いた。恥を忍んで次に記す。

※ ※ ※  
「種山石工 たねやまいしく」

江戸時代末期から明治中期まで県内を中心に数多くの眼鏡橋を架けた石工の一族。始祖は長崎奉行書所勤めの武士藤原林七だが、事情があつて八代郡種山村(現東陽村)に来て農業と石工を始め



たという。林七は長崎でひそかに教わつた円周率を用いて眼鏡橋を架け、この秘法は子の嘉八や孫の宇助らに伝えられた。一族の一人岩永三五郎は非凡な才能を發揮し、砥用の雄亀滝橋をはじめ、県内に十数橋を架けたと伝えられる。天保十一年(一

八四〇)には薩摩藩に招かれ、鹿児島市内の西田橋などを架けたことは有名。宇助ら兄弟も県内に幾多の橋を架けたが、曲線の目地は独特の手法。共同作業した場合が多く、砥用の霊台橋は代表作の一つ。三五郎帰郷後は、氷川を境に南部を三五郎の野津組が、北部を甥たちの種山組が担当する協定を結び、

共存を図つた。宇助の弟丈八は、通潤橋架設時の業績が認められて橋本姓を賜り、名も勘五郎と改めた。明治四年(一八七二)には新政府に招かれ、都内に皇居二重橋などを架け、帰郷後も活躍した。(昭和57年4月発行)

※ ※ ※

他人さまの説を史実と照合する手段も分からずに鶴呑みにしていた私は、林七が長崎奉行所勤めというのも疑うことなく、三五郎は少年少女向けの小説「肥後の石工」に、著者の今西祐行さんが「種山出身の石工」と執筆しておられたのでそう思い込んでいたが、昭和が終わりに平成に移るころ私は、肥後・熊本藩の公文書といえる古文書「町在(まちざい)」を知る機会に遭遇した。

霊台橋架設スタッフの一人、伴七のことを調べていたとき、K高校校務(当時)の蓑田勝彦さんに会い、貴重な助言を賜つたことが、「町在」を見るきっかけになった。以後しばらくは、熊本大学附属図書館や熊本県立図書館へ通い、「町在」に目を通すたびに、目からうろこが落ちる思いだった。

例えば、三五郎は「野津手永、西野津村、石工宇七と申者二男 三五郎」と墨書きされている。それで今は自信を持って、「三五郎は野津の石工です」と話せるようになった。

林七が長崎奉行所勤めだったこと、わ

けあつて種山村へ来たこと、姓が藤原だったことなど、探した史料には見当たらず、墓碑には「俗名 林七」とだけ彫られている。

丈八について、橋本姓を賜るのは「通潤橋架設の業績によるとの説を、何度も読み聞いたが、石工頭の宇市を差し置いて副頭(そえかしら)の丈八だけが姓を賜るのはおかしい」と、蓑田さんは指摘される。当時の肥後・熊本には寸志制度があり、一定額の献金により姓を名乗ることが許されていたからである。

改名した勘五郎が明治政府に呼ばれて上京したのは明治6年2月、帰郷は不明確だが同7年夏ごろ。その間に架設した眼鏡橋は、私の調査では神田筋違橋(「かんだすじかいはし」、後の萬世橋)よりよはしと浅草橋。帰郷土産に江戸橋設計図があるが、同橋の架設は明治8年だから勘五郎帰郷後のこと。皇居正門石橋の築造は、勘五郎帰郷から10年以上たつ明治20年。これらについては、都内の橋に詳しい伊東孝さん(当時・日本大文学部工学部教授)が山都町へ講演おいでた日の夜、歓談しながら確認したので間違いなし。

従つて、俗にいう皇居の二重橋は、勘五郎が架けた橋ではない。

「熊本大百科辞典」の改訂版が出るときは、史実を確認した内容の文章を書くつもりでいる。(2015年2月4日)



片寄 俊秀「南州橋」  
鹿児島県大島郡和泊町和泊(沖永良部島)

# 石橋のふる風

沖繩本島の北、約60キロに位置する沖永良部島。この日本の南の島に、堂々たる石造の2連アーチ橋「南州橋」がある。架橋は1919(大正8)年、各スパンは約3・65メートル、橋幅約4メートル、石工棟梁は鹿児島郡伊敷村大字小野の宝地常次郎と分かっている。橋名の由来か、橋のすぐそばには「南州神社」がある。そこは幕末のころ、南州と呼ばれた西郷隆盛が薩摩の国父、島津久光公の怒りに触れて流罪となり、1年



南州橋の基底部(上)と上流側(下)



半の牢獄生活の中で「敬天愛人」の思想を完成させた場所といわれる。南州橋のたもとには広い砂浜になっていて、かつては闘牛や牛のせり市、サーカス、映画の興行などが行われていたと伝えられている。

(水彩画・写真 片寄俊秀)

## 石橋構築・修復技術者養成事業を紹介する冊子を制作 公式ホームページの電子ブックで閲覧を

2011年度に始まった本会の石橋構築・修復技術者養成事業(上塚尚孝・実行委員長)。14年度は文化庁の補助を受け、「次世代につながる石橋構築・修復技術」と題した冊子(A4判・中面86ページ・カラー)を制作した。

これまでの事業の報告、技術指導をお願いしている肥後種山石工技術継承者・竹部光春さん(熊本・美里町在住)の冊子は300部発行。次回大会参加者に配布を予定しているが、発行部数に限りがあるため、電子ブックにして、公式

石工人生の紹介、石工技能者としての心得を確認した2014年度座学講座の様子、日本の石造アーチ橋の現状、熊本大学大学院の山尾敏孝教授からの寄稿などで構成されている。

ホームページで全ページを閲覧できるようにしている。ホームページの「石工養成事業」をクリックすると、案内ページが表示される。手持ちのパソコンやタブレットで閲覧いただきたい。



事業紹介冊子の表紙

## 飯星時春・元副会長

(熊本県)が、2014年5月9日永眠、88歳。聖橋を守る会会長、矢部(現・山都町)の石橋を守る会会長を歴任。

## 鶴田文史(本名八洲成・元副会長(熊本県))

が、2014年11月30日永眠、78歳。天草歴史文化遺産の会顧問、天草史談会代表、天草文芸会代表を歴任。

※物故者に関する会員情報があればお寄せください。

## 編集後記

会員の多様な活動を紹介しましたが、中でも4・5面の「甲賀十三橋めぐり」では、石橋をまちおこしに活用するには、各石橋をルートで紹介すること、ネーミングが重要なことを教えられました。1面の「諫早の親子眼鏡橋」というネーミングも引きつけられます。2橋は石橋保存の先駆的事例として、ワンセットであると思います。6面の石橋の現地保存の方法論は、会員としては知っておきたい内容でした。7面の「1♡めぐね橋」からは、一人歩きする伝承を修正する難しさを感じました。会報担当としては、正確な情報を紹介することを心に留め置かなければなりません。

(会報担当 中村まさあき)

# 日本の石橋を守る会

～石橋とその文化を大切に～

会報86号(通算) 2015(平成27)年3月31日発行

代表者 会長 甲斐 利幸  
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2  
通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360  
HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>  
BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>